

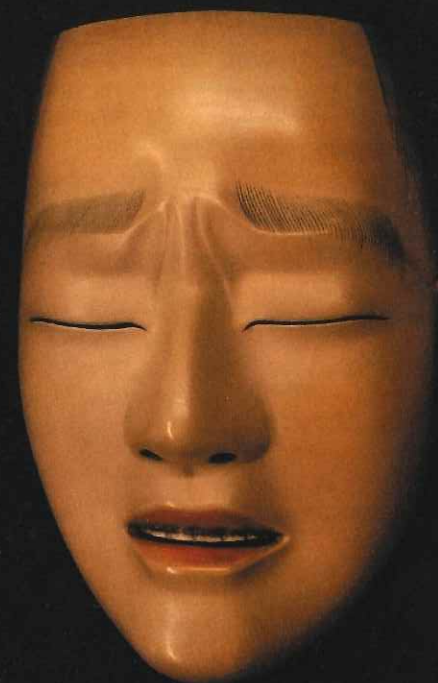
観
世
流

緑泉会

Kanzeryu Nob-Theatre

Ryokusenkai

能………**蟬丸**………**杉澤 陽子**
 狂………**口真似**………**大藏吉次郎**
 能………**通盛**………**鈴木 啓吾**



『蟬丸』入江美法 作

平成 29 年 第2回例会

5.20 [土] PM 1:00 ~ (開場 12:00)

喜多六平太記念能楽堂

『通盛』シテ：津村禮次郎

能 蟬丸 津村禮次郎
逆髪 杉澤 陽子

清貴 村瀬 提
興昇 村瀬 慧
興昇 矢野 昌平
博雅三位 大藏吉次郎

大鼓 柿原 弘和
小鼓 住駒 充彦

笛 槻宅 聡

後見 河井 美紀
奥川 恒治

地謡

新井麻衣子 吉留
藤村 答 中所 敬高
桑田 貴志 中森 宜夫
坂 真太郎 永島 貫太 充

【休憩 十五分】

狂言 口真似 太郎冠者 大藏吉次郎

主 榎本 元
何某 宮本 昇

難波 坂 真太郎
羽衣クセ 河井 美紀
善知鳥 桑田 貴志

地謡

永島 充
中所 宜夫
津村禮次郎
中森 貫太

【休憩 十分】

能 通盛 漁翁 新井麻衣子
平通盛 鈴木 啓吾

僧 高安 勝久
從僧 相元 正樹
鳴門ノ浦人 大藏 教義

大鼓 亀井 洋佑
小鼓 大山 容子

太鼓 小寺真佐人
一噌 庸二

後見 墨 敬子
津村禮次郎

地謡

河井 美紀
菅野 貞男 永島
桑田 貴志 中森 貫太
坂 真太郎 奥川 恒治

【終了予定 午後五時頃】

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場内によっては退場頂く事もございますのでご了承下さい。

第2回例会
2017.5.20 [土] PMI:00 (開場 12:00)
喜多六平太記念能楽堂
〒141-0021 品川区上大崎 4-6-9 TEL 03-3491-8813
JR、東急目黒線、地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩7分。
香港園手前の道を左折し約400m直進、杉野学園体育館手前を左に入る。
※駐車場がございませんので、お車でのご来場はご通慮下さい。



●入場料
会員券(年4回)……一般 20,000円 学生 10,000円
1回券(当日券)……一般 6,000円 学生 3,000円
●申込先:各出演能楽師または緑泉会まで
杉澤 陽子 TEL・FAX 03-6326-6645
鈴木 啓吾 TEL・FAX 03-3269-7018

〒184-0005 東京都小金井市桜町2-7-18
緑泉会 tel. 042-386-2131 fax. 042-386-2132

能 蟬丸 (せみまる)

延喜帝の第四皇子蟬丸(ッレ)は、生まれつき盲目であった。蟬丸を逢坂山に捨てよう勅命を受けた清貴(ワキ)は、蟬丸を逢坂山に連れて行くが、嘆く清貴に蟬丸は、後世を思う帝の叡慮だと諭す。清貴はその場で蟬丸の髪を剃って出家の身とし、篋、笠、杖を渡して涙ながらに去っていく。一人になった蟬丸は、その寂しさに琵琶を胸に抱いて泣き伏してしまふ。蟬丸の様子を見にきた博雅三位(四狂言)は、あまりの痛々しさに心を痛め、雨露をしのげるように藁屋をしつらえて、蟬丸を招き入れる。一方、延喜帝の第三皇女逆髪(シシ)は、皇女として生まれながら、辺地をさまよう身となっている。髪は乱れて逆立ち、都の童にまで笑われる有り様である。都を出て粟田口を抜け、音羽山を眺めつつ逢坂山に向かう逆髪は、水鏡に映る己の浅ましい姿に驚き嘆く。やがて藁屋から漏れ聞こえてきた琵琶の音を不審に思っ立ち寄ると、中から聞こえてきたのは弟宮の声。名乗る逆髪に蟬丸も驚いて戸を開け、ふたりは互いに手と手を取り、再会に咽び泣く。そして互いのわびしい境遇を語り、慰め合う。逢坂山に留まり続けることを宿命づけられた蟬丸と、放浪する運命を背負った逆髪。逆髪は暇を告げ、ふたりは涙ながらに別れていく。

狂言 口真似 (くらまれ)

主人に酒の相手を連れて来いといわれた太郎冠者は、知合いを尋ねて無理矢理連れて来る。主人が彼を見ると酒乱で有名な人なので、穏やかに帰そうと、太郎冠者に言う通りにするよう命じるのだが、太郎冠者はこれを取り違えて…

仕舞

難波(ななば)：難波の春の夜。かつて仁徳帝の即位を推進した百済国の王仁が現れ、春鶯・秋風楽・万歳楽・青海波など様々な舞楽の有様を見せ、天下を祝福する。

羽衣クセ(はろも)：漁師に羽衣を返してもらった天人。三保の松原のどこかな春景色をたたえ、袖をなびかせてつ舞を舞う。

善知鳥(うとこ)：在りし日に殺生に明け暮れた獵師の亡霊。その罪を懺悔するが、冥土で化鳥となった善知鳥に追いかけられ地獄の責め苦を受ける様を見せ、僧に回向を頼みつつ消え失せる。

能 通盛 (みちもり)

越前三位通盛と、宮中一の美女と謳われた小宰相局は大変に仲睦まじい夫婦であった。源平合戦の時には小宰相局も通盛に付き従って都を後にしたが、一の谷の合戦で通盛が命を落としたりと知ると、その後を追い阿波の鳴門で入水してしまう。能ではその場所が舞台となっている。

阿波の鳴門の浦にて僧(ワキ)が毎夜平家一門を弔っていると、女(前ツレ)と漁翁(前シテ)を乗せた小舟が漕ぎ寄せてくる。(実際に後見によって篝火を焚いた舟が出され、シテとツレが登場するが、場景を想像して頂くのが能独特の手法である。)僧の読経を聴聞したいという二人の望みを聞き入れて僧が経を読んだ後、この浦で果てた人を知っているかと聞くと、二人は平通盛と小宰相の局のことを語り、海中へ沈み姿を消す。(中ツレ)経を読んでみると、僧の前に武将姿の通盛(後シテ)と小宰相局(後ツレ)の霊が現れる。一の谷の合戦前夜の悲しい別れや、木村源五重章を討った最後の有様を語り、僧の読経によって成仏できたことを感謝して消えて行く。井阿弥の原作を世阿弥が改作したとも言われているが、前後にツレを登場させ、悲しい運命に翻弄された夫婦愛を描く、異色の修羅能である。

●平成29年 第3回例会 …… 9月17日(日)
能 …… 橋辨慶 …… 桑田 貴志
能 …… 龍田 …… 新井麻衣子